

新学校点描

昇降口の屋根の雪下ろしを民間の方
にお願いしました。命綱をつけなが
ら、全部の雪を下ろしてくれました。

《K中学校》

NO.16 R4. 2. 2

担当：校長

1月22日（土）Y県民ホールを会場に、全日本アンサンブルコンテスト第45回Y県大会が開催されました。本校の吹奏楽部で地区予選を突破した打楽器五重奏が出演し、結果銀賞を受賞しました。

最近は何となく眠れない夜を過ごし、早朝3時にびったり起きると、本を読んでみたり、考え事をしてみたり、という時間を過ごしている中で、気がついたらこうしてパソコンに向かっています。ふと孤独になったり、夜になると時々、寂しさでたまらないような気持ちになったりします。特にこの季節は。1月になると生徒たちも、欠席が目立つようになってきました。なんとなく気持ちがわかります。

今の学校はさまざまな決断を求められます。辛いこともたくさんあります。生徒のことを一番大事に考える、それでも、判断には勇気が必要です。2月1日付けの新聞には全国で教員の人数が不足していることが掲載されました。教師の仕事に魅力を感じなくなったからだと報じています。残念だけれど、なんとなくわかります。

孤独や寂しさを感じる度に、わたしの頭の中を以前読んだ宮沢賢治の詩がよぎります。こんな明け方に本棚の中を探して、どこかにあると思われる詩集を見つけるのです。

『永訣の朝』

眠れない夜を過ごし、パソコンに向かった後、朝になると、出勤前に除雪をします。年々、除雪する体力もだんだんなくなっているのが実感できます。ひとり除雪をしながら、お隣の家族の家から、朝食を囲んでなんだか楽しそうな声が聞こえてきます。

孤独や寂しさがおそってくると、私の頭の中に時々出てくるのは、宮沢賢治が妹のトシを看取る際につくった『永訣の朝』という詩の一部〈あめゆじゅとてちてけんじゃ〉と言った妹トシの言葉です。新型コロナ感染拡大になったときから、よく思い出すようになりました。

『けふのうちに とほくへいってしまう わたくしのいもうとよ

みぞれがふって おもてはへんにあかるいのだ

〈あめゆじゅとてちてけんじゃ〉

うすくあかくいっそう陰惨な雲から みぞれはびちよびちよふってくる

〈あめゆじゅとてちてけんじゃ〉

ありがたう わたくしのけなげないもうとよ

わたくしもまっすぐにすすんでいくから

〈あめゆじゅとてちてけんじゃ〉

はげしいはげしい熱やあへぎのあひだから おまへはわたくしにたのんだのだ

ほんたうに けふおまへはわかれてしまふ

— 中略 —



おまへがたべるこのふたわんのゆきに わたくしはいまころからいのる
どうかこれが天上のアイスクリームになって
おまへとみんなとに 聖い資糧(幸せな食べ物)をもたらすやうに
わたくしのすべての さいはひ(幸い)をかけてねがふ。』

〈あめゆじゅとてちてけんじゃ〉という言葉は、岩手の方言で「賢治兄ちゃん、雨雪をとってきてちょうだい」という言葉です。雨雪（あめゆじゅ）とはみぞれ雪のこと。宮沢賢治は病床の妹のこの願いを聞いて、鉄砲玉のように病室から戸外に飛び出し、松の葉に積もっている雪をおわんに入れて何度も持ってくるのです。妹が、〈あめゆじゅとてちてけんじゃ〉と言う度に、妹のために、何度も何度も繰り返すのです。

でも、そのうちに、あることに賢治は気づいたのです。妹のトシは、みぞれ雪が欲しいから、自分をお願いしているのではないのだと。賢治は、次のように書いています。

「死ぬというときになってまで、私を明るくしてくれるために、おまえは私に頼んだ。」

自分がもうすぐ向かう死という暗い病室の世界から、少しでも、兄だけは明るい外の世界に向かわせ、心を明るくさせたい。〈あめゆじゅとてちてけんじゃ〉という言葉には、そんな妹が兄を思う願いがあったのだと気がついたのです。そして、妹は亡くなります。

この詩の後半に、妹トシの最後の言葉が書かれています。

〈うまれで くるたて こんどは こたに わりやの ごとばかりで くるしなあよに うまれてくる〉
註) 今度は、こんなに私のことばかりで、お兄さんが苦しまないように 生まれてくるね。

わたしは、暗がりや吹雪の中で除雪をするとき、『永訣の朝』を思い出します。
「明るいところで生きてね」と誰かがわたしにささやきます。

隣の家からは、温かなオレンジ色の明るい光がリビングから漏れています。
家族の幸せそうな光がずっと続くように祈ります。

----- きりとりせん -----

ご意見・ご感想をお願いします。